

大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第38集

—平成20年度国庫補助事業調査概報—

2009

大山崎町教育委員会

大山崎町第 63 次 (7YYMS'SS-10 地区) 遺跡確認調査概要

調査地 大山崎町字大山崎小字白味才 39-3

遺跡名 白味才遺跡 (大山崎瓦窯跡)

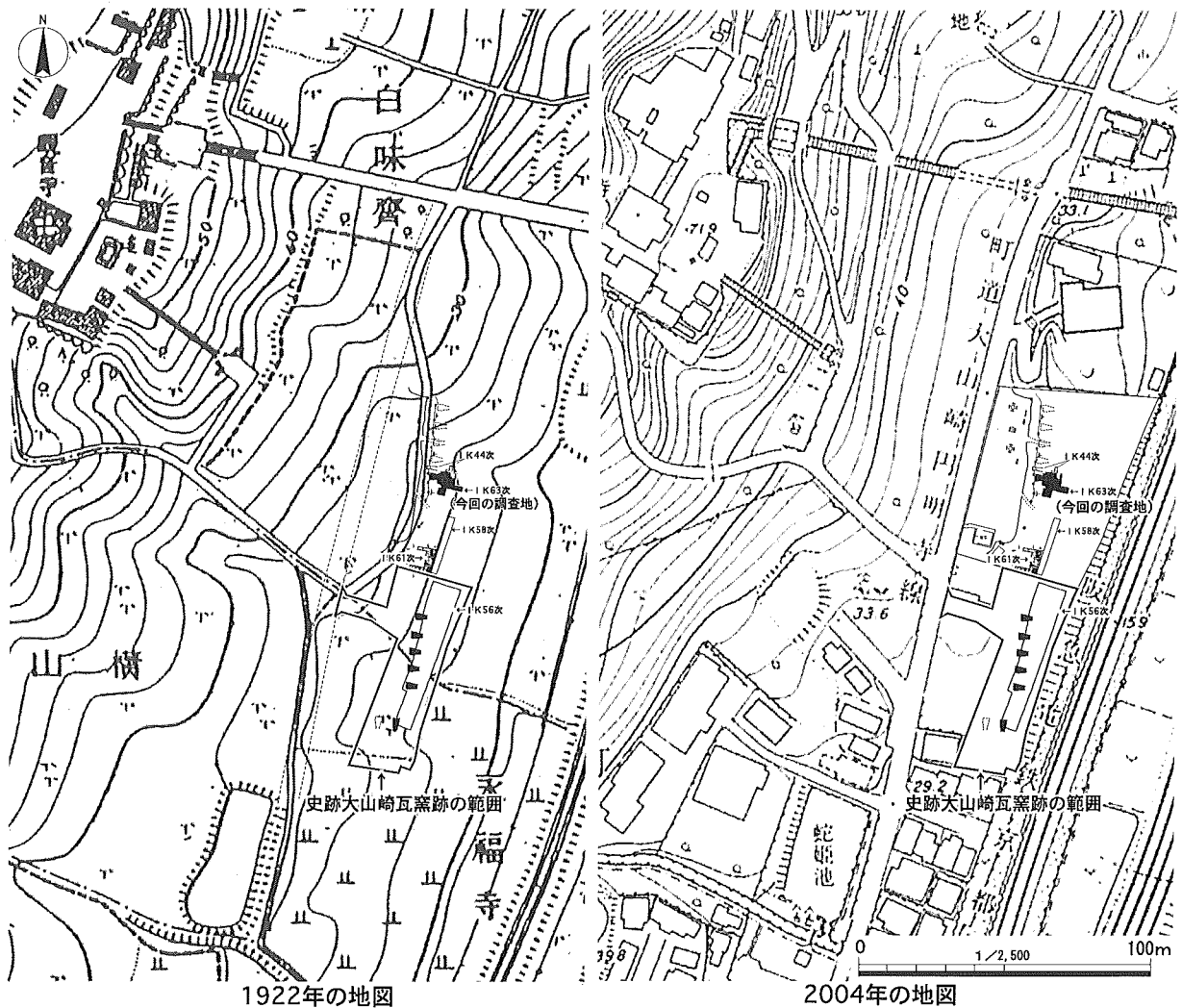
調査期間 平成 20 年 11 月 25 日～同年 12 月 24 日

調査面積 50 m²

1. 調査経過

大山崎瓦窯は、白味才遺跡の範囲に含まれる。当該地一帯は、昭和 30 年代後半から 40 年代に行われた個人住宅の造成や町道大山崎円明寺線の敷設工事によって平安京出土の同範瓦が採取されており、古瓦の散布地として知られていた。第 44 次遺跡確認調査 (平成 13 年) では、桜の広場前公園 (以下、公園) 東側の崖面において小規模な調査を実施し、ここでも平安京同範瓦が出土したが、遺跡の性格を特定するには至らなかった (文献 1)。

瓦窯の存在は、第 56 次遺跡確認調査 (平成 16～17 年) によって明らかにされた。この調査では、



第 2 図 調査地位置図

平窯6基が整然と配置された状況で検出され、出土した軒瓦によって、初期の平安京（794～）へ瓦を供給するための生産地であることが判明した。軒瓦の編年研究によれば、大山崎瓦窯は、西賀茂瓦窯・吉志部瓦窯に次ぐ生産地に位置付けられ、平安京造営を担った官営の瓦生産地のひとつとして評価される（文献2）。また、大山崎瓦窯の製品は、河陽離宮・嵯峨院・淳和院・雲林院の離宮や西寺・北野廃寺・大宅廃寺などの諸寺にも供給されている。このように大山崎瓦窯は、平安京および周辺諸施設の形成過程を解明する上で極めて重要な位置を占めており、平成18年1月26日に国の史跡に指定された（文献3・4）。

本町では、平成17年度から大山崎瓦窯の範囲を把握する目的で国庫補助事業として継続的に発掘調査を実施している。今年度の調査は、史跡指定範囲の北隣接地の崖面裾部で、大山崎瓦窯6号窯から約50mの位置に調査区を設定し、約50㎡の面積を発掘調査した。

当初の調査区は、東西方向に幅2m、長さ7.5mのトレンチを設定し、表土の掘削を行った。その結果、現在の崖面裾に古代の瓦が多く含まれる傾向がみられたため、崖面裾にそって調査区を南北方向に拡張させて調査区の全形を定めた。

2. 基本層序

基本層序は、第1～第4層に区分される。第1層は、灰褐色系の壤土層で、表土に当たる。第2は、黄褐色系の壤土で、土質は表土に近い。第3層は、赤褐色～茶褐色系の壤土・粘質土で焼土が混じる。これら第1～第3層は、ほぼ垂直に崖面裾を切り土した後の堆積層である。第1・2層は、西側からの流入土である。第3層は、焼土が混じることから、瓦窯に関係する2次的な堆積土に想定される。第1～第3層までは、染め付け椀が若干出土しており、崖面裾の切り土が近世後期以前になされたことを示している。第4層は、黄色礫質土である。いわゆる地山に相当する地盤層であり、この第4層上面で遺構面を検出した。

3. 検出した遺構

(1) 大山崎瓦窯7号窯廃絶以後の遺構

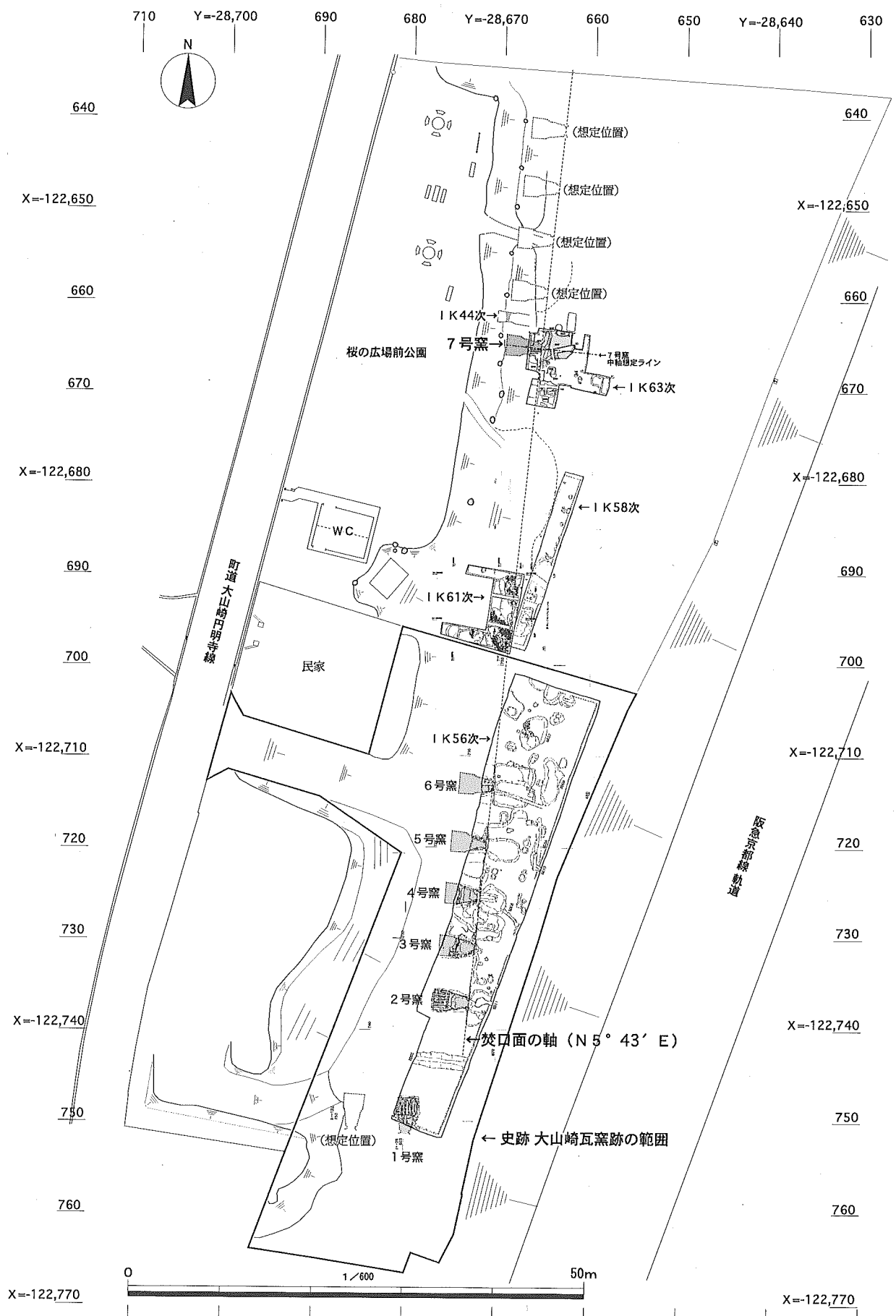
溝SD1 前庭部SX7の埋土上面を掘り込んだ遺構である。幅35cm、深さ10cmを測る。

土坑SX12 7号窯の燃焼室から前庭部にかけて掘り込まれた土坑状の遺構である。7号窯の燃焼室焚口付近は、床面の一部を残してこの遺構の構築によって破壊されている。西側はほぼ垂直に掘り込まれており、現況の崖面裾の形成に伴う遺構である。埋土は暗黄褐色壤土で、7号窯に関わる瓦が多く出土した。埋没時期を示す土器などは得られていない。

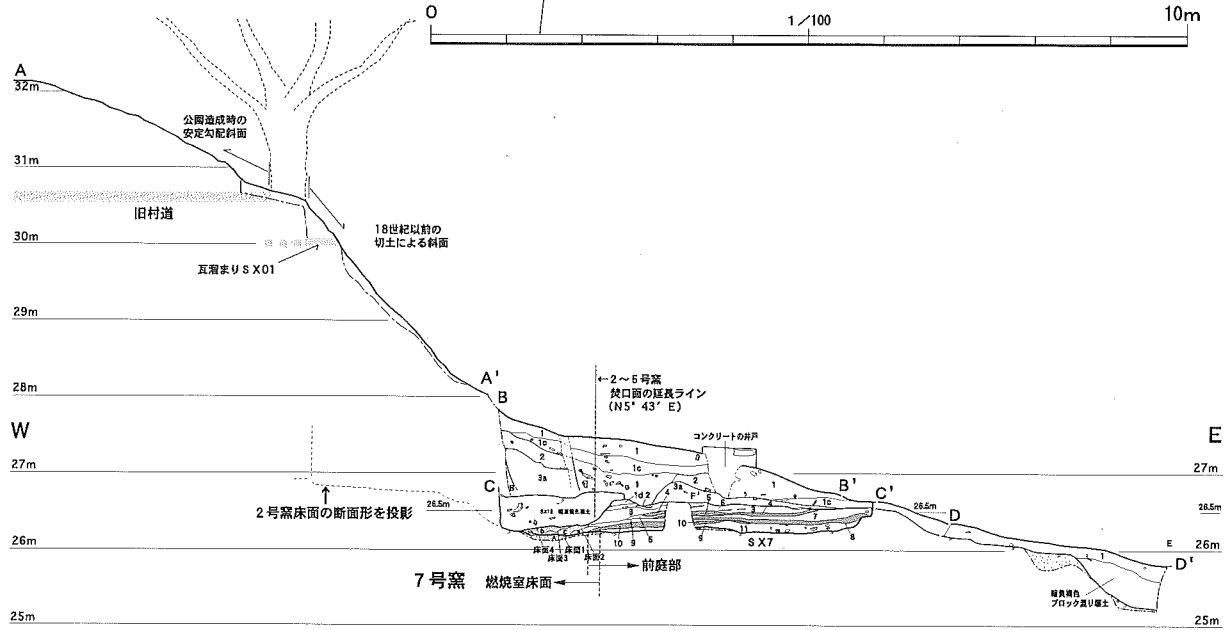
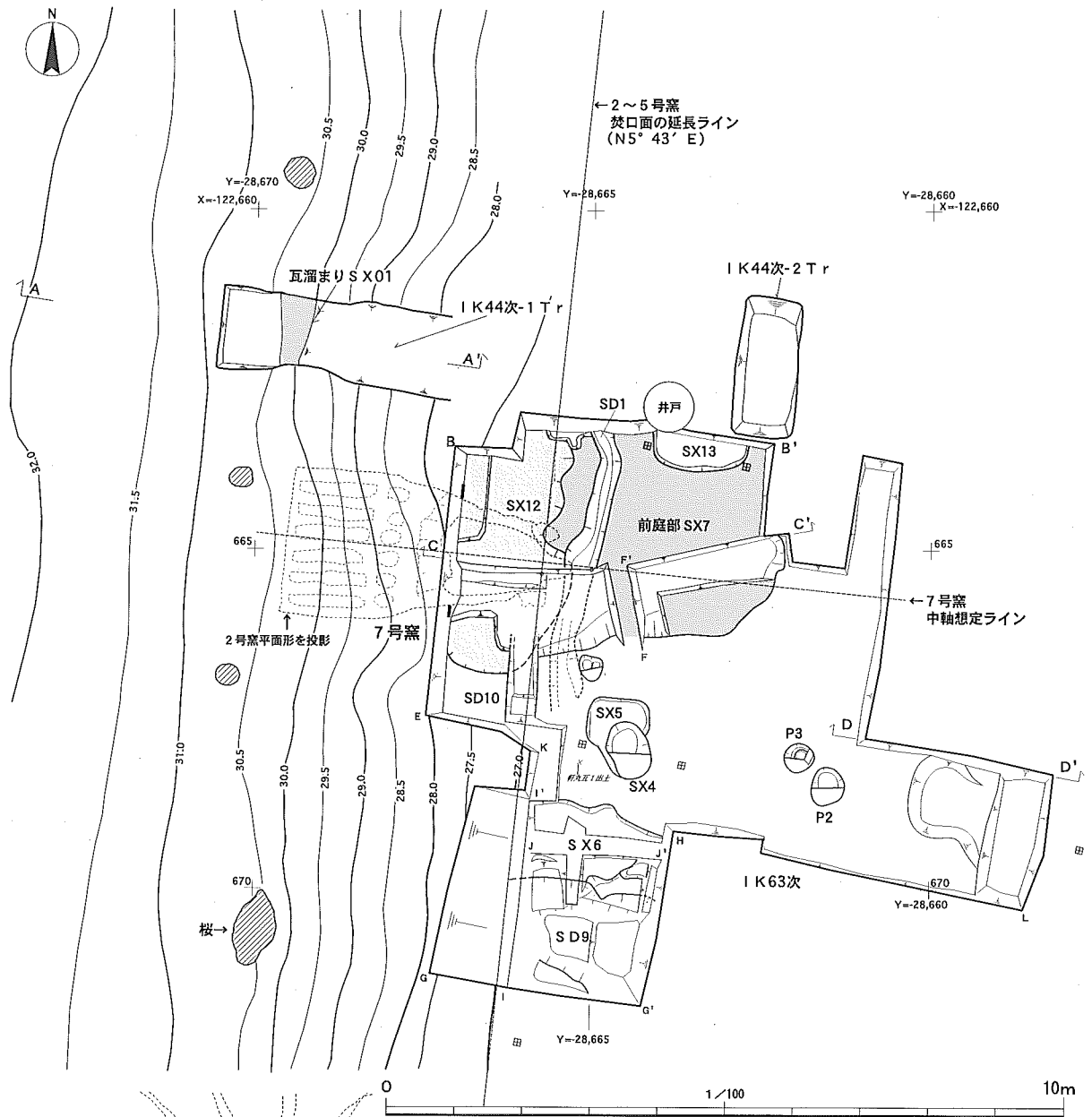
土坑SK13 前庭部SX7の埋土上面を掘り込む遺構である。埋土は、暗黄褐色粘質土である。

溝SD9 土坑状遺構SX6の埋没後に掘り込まれた遺構である。幅1.7m以上、深さ1.1m以上を測る。南肩は、調査区外に広がる。埋土は、1～4層に区分される。4層からは、少量の中世の土器に混じって、大山崎瓦窯に関わる瓦が多く出土した。

溝SD10 第4層および土坑SX12の埋土を掘り込む溝である。幅40cm、深さ30cmを測る。

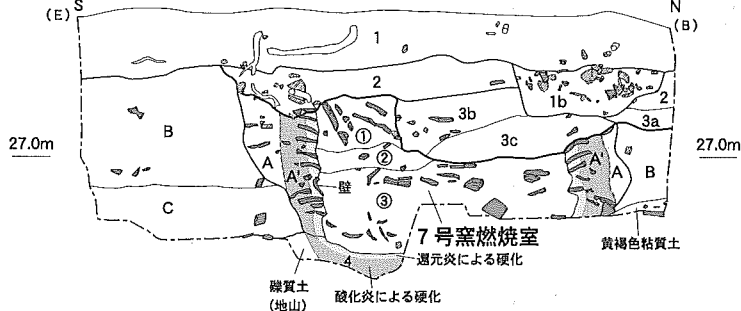


第3図 史跡大山崎瓦窯と周辺遺構



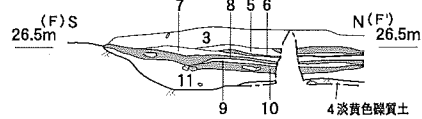
第4図 調査区周辺地形と遺構平面図・断面図

<7号窯燃焼室横断面-トレンチ西壁>

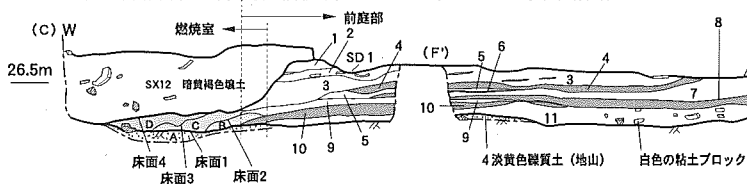


- [瓦窯内部の埋土]
 ① 赤褐色焼土混じり茶褐色壤土
 ② 暗赤褐色焼土混じり粘質土
 ③ 赤褐色焼土混じり粘質土
- [瓦窯構築時、或いはそれ以前の埋土]
 A 淡黄色壤土～粘質土
 A' Aの赤褐色化
 B 黄褐色壤土～粘質土
 C 暗茶褐色壤土

<前庭部SX7南北断面>

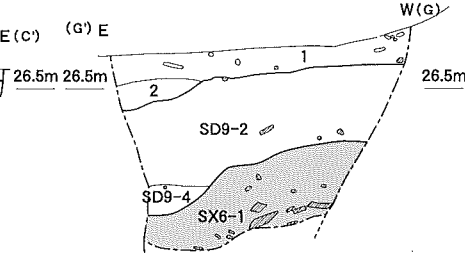


<7号窯燃焼室床面、前庭部SX7・土坑S X12東西断面>

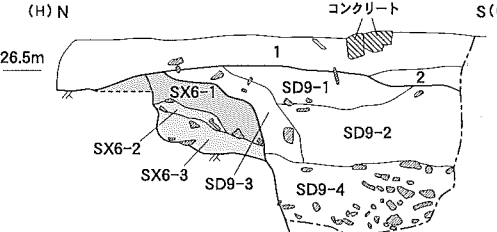


- S X07層名
 1 橙褐色焼土混じり粘質土
 2 茶褐色炭混じり土
 3 茶褐色焼土混じり土
 4 暗茶褐色炭混じり土
 5 暗赤褐色土
 6 暗黒褐色炭混じり土
- 7 暗茶褐色焼土混じり土
 8 黒褐色炭
 9 暗赤褐色茶褐色土
 10 黒褐色～暗茶褐色炭混じり土
 11 暗黄色礫混じり土
- 燃焼室床面層名
 床面1 (A 赤色化した礫質土[地山]で形成)
 床面2 (B 赤褐色焼土で形成)
 床面3 (C 赤色焼土で形成)
 床面4 (上面はSX12によって破壊)
 (D 灰褐色～黄褐色焼土で形成)

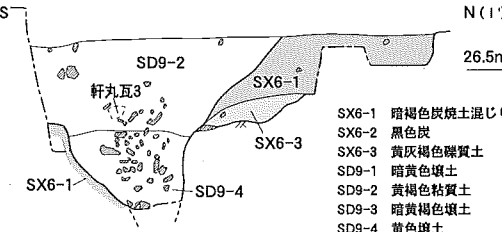
<溝状SD9、落ち込み状遺構SX6トレンチ南壁>



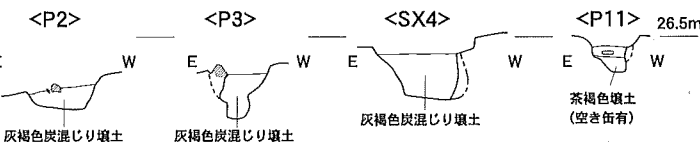
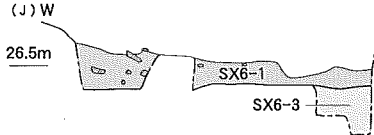
<溝状SD9、落ち込み状遺構SX6トレンチ東壁>



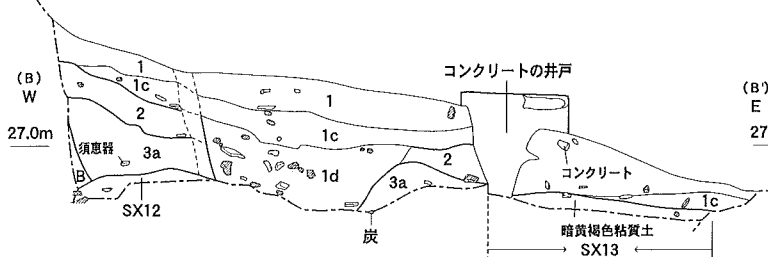
<溝状SD9、落ち込み状遺構SX6トレンチ西壁>



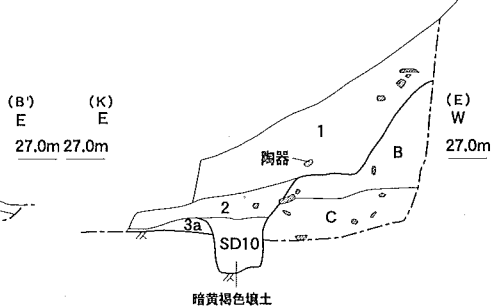
<落ち込み状遺構SX6北壁>



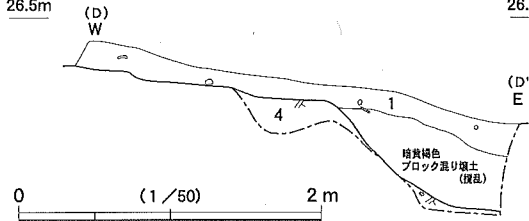
<トレンチ北壁>



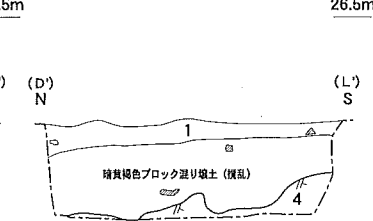
<トレンチ南壁>



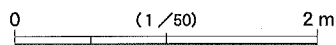
<トレンチ北壁>



<トレンチ東壁>



- [基本層序]
 1 表土 茶褐色～黄褐色壤土
 1b 暗灰褐色壤土
 1c 黄褐色壤土
 1d 暗灰褐色壤土
 2 暗黄褐色壤土
 3a 暗黄色壤土
 3b 赤褐色焼土混じり
 淡茶褐色粘質土～壤土
 3c 淡赤褐色焼土混じり粘質土
 4 黄色礫質土(地山)



第5図 断面図

埋土は、暗黄褐色壤土である。土坑 S K 12 を掘削する過程でその存在を認識した。そのため北端は確定できなかった。

(2) 大山崎瓦窯 7 号窯に関わる遺構

大山崎瓦窯 7 号窯とその前庭部 (S X 7)、落ち込み状の遺構 (S X 6) を検出した。

7 号窯 燃焼室の横断面を調査区西壁で検出した。窯は東に開口する。燃焼室の前半から前庭部にかけては、後世の崖面形成に伴う土坑状の落ち込み (S X 12) によって破壊を受け、床面の一部を残して、大半は遺存しない。燃焼室横断面の観察によれば、燃焼室の側壁の遺存高は、最終床面から南壁が 94cm、北壁が 74cm を測る。内法は、170cm を測る、壁体は、半截平瓦の側面を内側に向け、スサ入り粘土を緩衝させ、内傾させながら積み上げている。南壁の一部にはスサ入り粘土の壁面が遺存している。壁体では、半截平瓦の外側約 10cm までは酸化炎により赤色化し、内側付近は還元炎により灰色化している。

断ち割りによる断面観察の結果、燃焼室の床面は 4 面の存在が確認できる。最終の床面 (A) は礫質土 (第 4 層、地山) 直上に当たる。その後、焼土層が燃焼室に向かって内傾して各床面 (B~D) を形成する。最新床面 (D) は、後世の遺構 (S X 12) によって削平を受けている。調査区西端から東 117cm の地点以東では、炭と焼土の互層が形成され、前庭部の堆積状況を確認することができる。上部は遺存しないが、この燃焼室床面と前庭部の堆積状況の変化点が焚口に当たるとみて大過ない。7 号窯燃焼室横断面の壁体位置と、窯の全容が判明している 2 号窯燃焼室の同じ法量の箇所を図上で合成させると焚口想定位置は、2 号窯のそれと合致する。したがって、7 号窯は、2 号窯と同規模である可能性が高い。

前庭部 底は舟底状の断面形を呈し、全長は先述した焚口位置から東端まで 360cm を測る。前庭部の底面は、南肩部の検出面から深さ 31cm を測る。前庭部の埋土は、瓦がほとんど含まれておらず、窯からかき出された炭と焼土で形成されており、すべて窯の操業時に伴う堆積とみられる。燃焼室の各床面と前庭部埋土の堆積状況によれば、床面 A に対して前庭部第 11 層、第 10 層が対応し、床面 B に対して前庭部第 9 層以上第 4 層以下の層が対応し、床面 C に対して、前庭部第 8 層以上第 3 層以下の層が対応する。

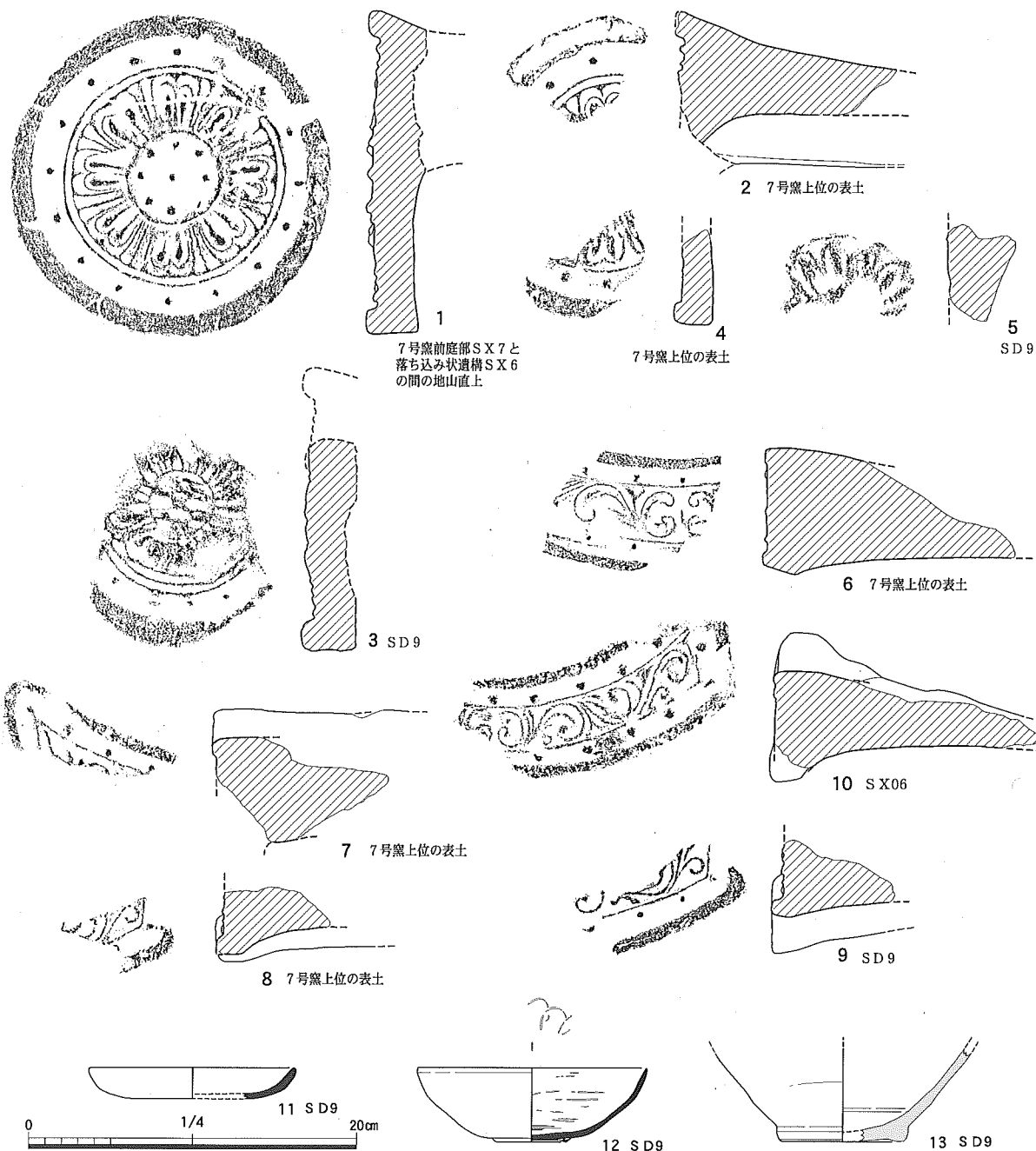
落ち込み S X 6 深さ 110cm 以上を測り、調査区南側にさらに展開する。遺構の底面は不整形であり、深さや埋土の状況は、前庭部と様相を異にしておける。現状では、比較的規模の大きな溝状の遺構の性格を想定しておきたい。したがって、7 号窯の南には、窯の存在を積極的に示す痕跡は得られていない。南半は、溝 S D 9 の開削によって埋土の上半は遺存しない。

4. 出土遺物

出土遺物は、コンテナ 18 箱が出土した。その大半は、大山崎瓦窯に関わる瓦である。土器は、溝 S D 9 と、検出面より上位の包含層から少量出土したのみである。

軒瓦の出土位置・層位については、第 4・6 図に示した。1 は、西賀茂瓦窯 NS151B と同範。外

区の珠文の外縁側に範傷があり、これにより、大山崎瓦窯1号窯焼成室畝端構築材に用いられた軒丸瓦とも同範であることが確認できる。外縁は平坦で、範端痕はみられない。側面は、丸瓦部の頂部を縦方向に削り、瓦当側面は、平行方向に削る。裏面は、指頭圧痕が微弱に残る。丸瓦端面の剥離痕には、縦位の刻み目が約3センチ間隔で4本みられる。2は、1と同範と思われる。3は、西賀茂瓦窯(NS154A)、吉志部瓦窯(Ka2)と同範。周辺では、同範品が採取されているが、調査での出土は初出である。この軒丸瓦は、範傷の進行が4段階に区分され、西賀茂瓦窯から吉志部瓦窯へ範が移動している。本例は、その第4段階よりもさらに範傷が進行しており、吉志部瓦窯よりも後に位置づけられる。遺存状況が良好でないため、工人の異同までは問えない。4は、大山崎瓦窯の溝SD05出土軒丸瓦7(文献2第13図)に似るが、子葉の盛り上がる様子が異なるようであり、異範の可能性



第6図 出土遺物実測図

が高い。5は、複弁と単弁が入り交じる文様構成を特徴としており、大山崎瓦窯6号窯前庭部出土の軒丸瓦4（文献2第13図）に似るが、範の異同は確定できない。6は、対抗C字形の中心飾りの中心に縦位の副葉を追刻する。追刻以前のもは、吉志部瓦窯と大山崎瓦窯溝SD05（文献2）から出土しており、追刻以後のもは同じくSD05から出土している。7～9は、6の同範品。10は、右第2単位下外区に「西」銘を追刻する。追刻以前のもは、前掲のSD05で、追刻以後のもは大山崎瓦窯3号窯前庭部、4号窯燃焼室で出土している。本例では、「西」銘右の珠文の下の範傷が顕著であることが知られる。11～13は、溝SD6の出土。このほか、溝SD6からは、大山崎瓦窯に関わる瓦が多く出土している。

5. 調査成果

今回の7号窯の検出によって大山崎瓦窯の範囲が北側に大きく広がることが判明した。焼成室床面レベルの標高は、7号窯が26.2m、2号窯が23.06m、比高差3.14mを測る。地形的には北側が高く、平均勾配は、2°29′を測る。7号窯の中軸位置は、南の瓦窯群（仮称、南群）の北端に位置する6号窯の中軸から約48.3m北に当たる。その間では、2度の発掘調査成果（IK58次、IK61次調査、文献5・6）によれば、瓦窯の存在は想定し難い。南群の2号窯から5号窯は、焚口および両袖の瓦積みの面を一直線に揃えて規格的に配置されているが、7号窯焚口位置は、その北延長ラインに一致する。つまり、7号窯は、南群と同じ割付によって配置され、同じ施工主体によって開窯されたことが明白である。出土した軒瓦の共通性もこの推測を裏付ける。南群の様相を勘案すれば、7号窯が単独で存在したとは考え難い。他の未知の数基の窯によって7号窯を南端とする北群の瓦窯群の存在が予測されるのである。このことは、大山崎瓦窯が開始当初から、いくつかの瓦窯群によって構成された大規模な官営工房として操業していたことを端的に示している。またそれとともに、その供給地である平安京および周辺諸施設の造営体制が早い段階から機能していたことを示す物的証拠でもある。

出土軒瓦では、軒丸瓦1・3の存在が特筆される。軒丸瓦1の存在によって、1号窯材の同範瓦は、西賀茂瓦窯から製品としてもたらされたものではなく、西賀茂瓦窯から瓦範が移動して大山崎瓦窯で焼成されたものであることがほぼ確定した。軒丸瓦3については、吉志部瓦窯からもたらされた瓦範の存在をさらに明らかにした。これら軒丸瓦の出土は、西賀茂瓦窯・吉志部瓦窯の流れを受け継いで大山崎瓦窯が存続するというこれまでの所見をさらに補強した。

文献

- 文献1 大山崎町教育委員会2002「大山崎町第44次（7YYMS'SS-6地区）遺跡確認調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第23集）
- 文献2 大山崎町教育委員会2005「大山崎町第56次遺跡確認調査（7YYMS'EG-6地区）概要」（『大山崎町埋蔵文化財発掘調査報告書』第31集）
- 文献3 大山崎町教育委員会2007『大山崎町文化財年報』平成17年度
- 文献4 大山崎町教育委員会2008『大山崎町文化財年報』平成18年度
- 文献5 大山崎町教育委員会2008「大山崎町第58次（7YYMS'SS-8地区）遺跡確認調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第32集）
- 文献6 大山崎町教育委員会2008「大山崎町第61次（7YYMS'SS-9地区）遺跡確認調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第36集）
- 文献7 財団法人古代学協会1978『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告第4輯
- 文献8 吹田市史編さん委員会編1981「吉志部瓦窯跡」『吹田市史』第八巻別編